

# いわゆる人口問題の位相（6）

——マルクスの人口論（ii）

仲村政文

目次	
I. 論点開示	6. 小括：マルクス人口論の意義と限界
1. 人口問題は“アポリア”か	IV. 「人的資源」論の射程
2. 人口変動の「転換」をめぐる	V. 人口変動の地域特性
3. 人口政策におけるイデオロギー問題	VI. 少子高齢化「問題」の歴史的位相
(以上 第71号)	——結びに代えて
II. 人口問題へのアプローチ	III. マルクスにおける人口論の展開構造
——ゴドウィン・マルサス論争に寄せて	2. マルサス人口論批判
1. 時代の精神	(1)
(以上 第72号)	マルサスの理論〔人口理論〕、ちなみにこの理論は、彼の発明ではないのであって、不当にも彼がこの理論によって名声をわがものとしたのは、彼がこの理論を告知するさいの坊主風の熱心さによってであり、もとをただせば、彼がこの理論にかけたアクセントによってにすぎないのであるが、このマルサスの理論は、二つの面からみて重要である。すなわち、第一に彼は資本の残忍なものの考え方に残忍な表現を与えたからであり、第二に、彼はあらゆる社会形態のもとに過剰人口の事実があると言い張ったからである。 <sup>1</sup>
2. ゴドウィン批判と「人口原理」	われわれは先に、マルクスの人口論はマルサス人口論への批判を踏まえて練り上げられたものであると示唆しておいた（本稿シリーズ〔5〕34ページ）。これを受けて本節においては、『資本論』における固有の人口論の展開にいたる過程を跡づける。当然のことながら、われわれは
3. ゴドウィンの人間把握と「人口論」	
(以上 第74号)	
4. マルサス人口論の基本的性格	
——「社会改良」の錯誤	
(以上 第77号)	
III. マルクスにおける人口論の展開構造	
1. マルサス批判の水脈とマルクス	
(以上 第81号)	
2. マルサス人口論批判	
3. マルクスにおける人口論の方法	
4. 資本の本源的蓄積と「人口問題」	
5. 資本の運動法則と人口動態	
——相対的過剰人口論	

<sup>1</sup> K.マルクス『1857-58年の経済学草稿』（『資本論草稿集』（以下『草稿集』と略す）②大月書店、1993）331ページ。

そこにマルクスの方法論を垣間見ることができるのだが、これについては、文脈において必要なかぎりにおいて触れるにとどめる。

ところで、冒頭に掲出した一文は、マルクスの『1857-58年の経済学草稿』から引いたものであるが、みられるとおり、ふたつの視点（「二つの面」）からマルサス人口論の特質について簡潔に批判している。ひとつは、イデオロギー批判である。マルクスのマルサス人口論批判は1840年代にあっては、エンゲルスと同様に、主要にはそのイデオロギー的性格を明らかにするものであったが——後に触れる手稿『賃金』〔労賃〕（1847）は別として——、このことはこの草稿においても継承されている。そして、ここにみる「残忍なものの考え方」「残忍な表現」などという表現は文学的であるとはいえ、エンゲルスのいう「絶望の体系」「下劣な軽蔑すべき学説」（既引用）という表現に劣らず、極めて厳しいものとなっている。

マルクスはさらに、『経済学批判（1861-1863年草稿）』（『剰余価値学説史』）における「いわゆるリカードの法則の発見に関する覚書」のなかで、J.アンダソンの地代論に言及しつつ、辛辣なマルサス批判を展開している。マルクスによれば、「マルサスは彼の人口法則にはじめて経済学的であると同時に現実的な（博学的な）基礎を与えるために、アンダソンの地代論を利用したのであるが、一方、それ以前の著述家たちから借りてきた幾何級数や算術級数というたわごとは、まったくの幻想的な仮説だったのである。」<sup>2</sup> このように論難するマルクスはさらに続けて、アンダソンからの剽窃を非難しつつ、

『人口論』（1798）、『穀物条例論および地代論』（1815）、さらには『経済学原理』（1820）のそれぞれについて、その階級的な性格を簡潔に解き明かし、次のようにのべる。

「マルサスによる科学上の諸結論は、支配階級一般にたいしては、またとりわけこの支配階級のうちの反動的諸要素にたいしては、『思いやりのある』ものである。言い換えれば、彼は、これらのものの利益のために科学を偽造するのである。これに反し、その結論は、抑圧されている諸階級にかぎりでは、冷酷である。彼は冷酷であるだけではない。彼は冷酷であることを気取り、それを皮肉に得意がっているのであって、その結論が困窮生活者に向けられているかぎりでは、彼の立場から科学的に正当化されるであろう程度を越えてまでも、その結論を誇張するのである。」<sup>3</sup>

こうした言説に対して様々な批判——嫌悪感——が表白されるのであるが、その典型例のひとつが、J.A. シュムペーターの批判である。シュムペーターはのべる。「マルクスは彼〔マルサス〕に辛辣な怒りを投げつけた。ケインズは彼を称賛した。この罵倒も賞賛もともに偏見に由るものであることは容易にわかる。僧服ぐらい、マルクス——もしくはマルクスにおける教会外的ブルジョア急進派<の思想>——が嫌悪したものはなかった。そのうえ、マルクスは食糧における自由貿易に味方した人々には決して功績を認めることはなかったが、そうでなかった人々に対しても、ほかならぬ人をしょげさせるような誹謗を投げつけた。こういった人間は、マルクスおよびもちろん彼の忠実な追隨者にとっ

<sup>2</sup> K.マルクス『経済学批判（1861-63年草稿）』（『草稿集』⑥大月書店、1981）156ページ。

<sup>3</sup> 同前、163ページ。なお、マルクスはリカードについて一節をもうけて、マルサスの剰余価値をめぐる「学説」を詳細に検討している。

ては、地主的利益のおかかえ者であった。マルサスの貢献をこのように取り扱うやり方は、他の人々がリカードはユダヤ人であり『金融界の利益の味方』であるとするやり方と少しも異なるものではない<sup>4</sup>と。だが、シュムペーターの批判は公正とはいえない。マルクスのプロテスタントの人口論への批判<sup>5</sup>を「僧服」批判と取り換えている。また、地主階級の利益擁護については周知のところであり、シュムペーターは何らかの反証を挙げるべきだったのである。

このようにシュムペーターは、引照や反論を欠いたままマルクスを厳しく批判するとともに、次のようにマルサスを評価する。「その著作が人々の心をかき乱して、上にのべるようなく各種の情熱的な評価を喚起せしめた人物は、ただそれだけの事実によっても、決して凡庸の徒ではない。」<sup>6</sup> こうした評価の仕方は情緒的であり、およそ学問的とはいえない。

いずれにせよ、ここで留意すべきは、核心をなす論点はシュムペーター自身ものべるように——前述のように、われわれも同様に理解しているのであるが——、「貧困についての過剰人口説」こそマルサス主義の「本質」にはかならないという点<sup>7</sup>に深くかかわっているということである。この「問題」は社会問題の核心をなす普遍的な論点を含んでいるのであり、刮目すべきは、この問題は同時に、濃厚にイデオロギー

的性格を帯びるということである。つまり、「特定の立場からなされる主張」（本稿シリーズ〔1〕31ページ参照）としてのイデオロギーが常に表出するということである。とりわけマルサスの時代にあつては、「過剰人口と貧困」をめぐる問題は深刻であり、同時代人の詩人ワーズワースが詠んだように「お互いが傷つけ合つて、すべて健全な成長を阻むような——集団の恐怖」（既引用。本稿シリーズ〔5〕22-23ページ）という状況が現出し、その解決をめぐる階級的立場が露わとなったのである。

改めて顧みると、ディケンズやワーズワースら同時代人がマルサスへの辛辣な批判を展開したのもこの点にかかわっていたのである。そうした水脈において、マルクスの批判もまた「辛辣」となっているのであって、その辛辣さはマルクス固有のものでないのである。マルクスはいわゆる『剰余価値学説史』（『1861-1863年草稿』）において、W.コベット（1762-1835）のマルサス批判にふれて次のようにのべている。「……マルサス——コベットが乱暴にそう呼んでいるとおりの『山師坊主』……——にたいするイギリス労働者階級の憎悪は、まったく当然である。そして、民衆はここでは正しい本能をもって、科学者 (*homme de science*) ではなく、買収された彼らの敵の弁護人、支配階級のための無恥な追従者に相対しているということに気

<sup>4</sup> J.A. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, George Allen & Unwin, 1954, pp.480-481. 東畑精一訳『経済分析の歴史』3, 岩波書店, 1956, 1012ページ。旧漢字は新漢字に改めた。また、訳文は一部変えた（以下同じ）。

<sup>5</sup> マルクスの次のようなアイロニーをみよ。「〔牧師たちは〕牧師の独身というカトリックの命令をみずから払い落として、『産めよ殖えよ』を自分たちの特別な聖書の使命として主張するあまり、至るところでまったく見苦しいほどに人口の増殖に寄与しながら、しかも同時に労働者たちに向かっては『人口の原理』を説教した……、たいていの人口論者はプロテスタントの牧師である。」(K.マルクス『資本論』大月書店版②, 805ページ)

<sup>6</sup> J.A. Schumpeter, *op.cit.*, p.481. 東畑訳, 3, 1014ページ。

<sup>7</sup> J.A. Schumpeter, *op.cit.*, p.257. 東畑訳, 2, 537ページ。

づいていたのである。』<sup>8</sup>

マルクスはここで具体的な典拠を示してはいないが、こうした言説は、コベットの戯曲『過剰人口』によってその一端を引証することができる<sup>9</sup>。この戯曲は喜劇風に仕立てられた政治劇である。舞台では貧しい農業労働者の結婚をめぐる騒動（ドタバタ喜劇）が演じられるが、刮目すべきはマルサス主義者と結婚を間近にひかえた娘との間にかわされる、次のような会話である。「[マルサス主義者の男爵] ところでお嬢さん、10年か、12年くらいの間、“道徳的抑制”を自分に課してみる気はないかな？」「[許婚者] どういうことですか？」「[男爵] 30歳くらいまで独身でいることはできないのかな？」「[許婚者] 30歳まで！」。男爵はマルサスのいう「道徳的抑制」を持ちだして、結婚を大幅に延期するよう打診するのである。

また、もう一人の男爵はこの結婚を阻止しようとするが、これは村人たちに阻まれる。だが、二人の挙式後猶も、「若者たちよ、子を産み、育てることについて祈ろうではないか。“過剰人口を抑制し”、“道徳的に抑制しようではないか”」というように忠告する。こうした妄言にたいして村の若者たちは、次のように叫ぶ。「ティンプル〔前出の男爵〕を縛り首にせよ、彼が何を知っているというのだ？／聖書は産み殖やせと命じた、／お前なんかロンドンに戻ってしまえ、／我々が平和に生き、愛し合えることができるように」。

ここにみるように聖書を引き合いにしてマルサス批判を試みることは決して珍しいことではないが、いずれにせよ、マルサスの時代にあつては、彼のいう“道徳的抑制”という言葉が巷間に膾炙していたことが窺がえる。そして、ワーズワースらの知識人や社会運動家のみでなく、マルクスによれば、民衆の「正しい本能」もまたその本質を見抜いていたのであり、労働者階級はマルサスの“残忍性”にたいして「憎悪」の念さえ抱いていたのである。マルサス批判の水脈は実際のところ、われわれが先にみてきた水脈よりもより深い地層において、より広い幅をもって波打っていたということになるのである。マルクスの辛辣なマルサス批判——イデオロギー批判——もこうした水脈に踵を接していたのであって、イデオロギー批判に関するかぎり、当時にあつては特別のものではないといふべきであろう。

ここでもうひとつ看過できないのは、先の『剰余価値学説史』における、マルクスのマルサス批判はリカードの所論との対比において展開されているということである。リカードには「科学的な誠実さ」がみられるのにたいして、マルサスは「科学を偽造」していると評定する。そして、それが「卑劣」であるのは、「科学をそれ自身（それがどのように誤っているとしても）からではなく、それと無関係な外部の利益からとりいれられた立場に適応させようとする」<sup>10</sup>からであるという。また、マルクスは別

<sup>8</sup> K.マルクス『経済学批判（1861-63年草稿）』（前出）164-165ページ。

なお、マルクスはコベットを評して次のようにのべている。「コベットは確かに今世紀中のイギリス最大の政治評論家であるが、彼にはライブツィヒ教授の教養は欠けていたし、また、彼は『教養ある言葉使い』にまっこうから反対した人であった」（同前、164ページ）。

<sup>9</sup> 以下、福土正博訳による（福土正博「モラル・エコノミーとポリティカル・エコノミー——ウィリアム・コベット『過剰人口』を素材に——」東京経大会誌、No.186、1974）。

<sup>10</sup> K.マルクス『経済学批判（1861-63年草稿）』（前出）162ページ。また、他の箇所において、マルクスの「学問」における「卑劣さ」は「無恥な、機械的になされた剽窃」において、また、「学問上の諸前提から引き出しているあれこれと顧慮した不徹底な結論」において現れているとのべている（同前）。

の側面からリカードを「博愛主義者」と評定するのにたいして、マルサスは「生産のためには労働者を駄獣にまで引き下げ、かれらにたいして餓死と強制独身さえも宣言する」<sup>11</sup>として、これを「冷酷」と評している。因みに、リカードの「博愛主義」についてマルクスは引照していないが、リカードが過剰人口の防止について述べている、次のような一文が参照されるべきであろう。「人類愛の友が願わないではいられないのは、すべての国で労働階級が安楽品や享楽品に対する嗜好をもち、それらの物を入手しようとする彼らの努力があらゆる合法的手段によって刺激されることである。過剰人口を防ぐには、これにまさる保障はありえない。」<sup>12</sup>

こうしてみると、シュムペーターらの批判は正鵠を射ているとは言い難い。いずれにしても、われわれはここにマルクスのイデオロギー批判の先鋭性をみることができよう。（なお、マルクスのマルサス批判に対する反論——批判——については、別の角度から再度、本稿末尾において改めて触れる。）

もうひとつの「重要な面」とされる、「あらゆる社会形態のもとに過剰人口」が存在する——『人口論』および『経済学原理』のいずれにおいてもみられるのだが——というマルサスの理論的立場にたいして、マルクスはどのような批判を展開しているのであろうか。

## （2）

マルクスは『1857-58年の経済学草稿』に先立って、『賃金』『労賃』（1847）において、労働賃金について論究するなかで、マルサスの人口論に言及している。この手稿は、1849年に『新ライン新聞』に掲載された『賃労働と資本』へと連なる論点を含んでおり、そのための手稿のひとつとみなすことができよう<sup>13</sup>。

この手稿においてマルクスは、W.アトキンソン、T.カーライル、J.R.マカロック、J.ウェード、C.パベッジ、A.ユア、P.L.E.ロッシ、A.E.シェルビュリエ、J.F.ブレイらの著作から賃金に関する叙述の抜粋やメモとみなされる記述を残している。

ここで刮目されるのは、次の点である。まず、アトキンソンの項において、「人口理論について若干述べること」<sup>14</sup>とするメモがみいだされ、賃金と人口との関連にふれることの必要が示唆されているということである。次いでカーライルの項において、マルクスは極めて簡潔に「マルサス主義者や経済学者の全理論は、要するに労働者は子供をつくらないことによって需要を減少させることができる、ということにほかならない」<sup>15</sup>（下線は仲村）とのべている。ここで「需要（Nachfrage）」とあるのは「供給」の誤記であると思われるが、マルクスは続けて、生

<sup>11</sup> 同前、162ページ。

<sup>12</sup> D.Ricardo, *On the Principles of Political Economy, and Taxation*, in *The Works and Correspondence of David Ricardo*, Vol. I, Edited by P.Sraffa, Cambridge, 1953, p.100. 羽島卓也・古澤芳樹訳『経済学および課税の原理』岩波文庫、上巻、1987、142ページ。“The friends of humanity”は「人類の友」と訳されているが、これを「人類愛の友」に改めた。

<sup>13</sup> 手稿『賃金』の注解において、「カール・マルクスの手稿『賃金』は、彼の未完成の著作『賃労働と資本』（……）と直接の関連性があり、右の著作にたいする重要な補足である」（『マルクス・エンゲルス全集』（大月書店）第6巻、655ページ）とのべられているが、「重要な補足」ではなく、先行する理論（定礎）として位置づけられるべきであろう。

<sup>14</sup> 『マルクス・エンゲルス全集』（大月書店）第6巻、521ページ。

<sup>15</sup> 同前、同ページ。訳は一部変えた。

産力の増大が賃金におよぼす影響や労働者と「雇用主」との競争、労働者相互の競争、賃金の変動、賃銀の最低限などについて論述し、これらに次いで「労働者状態の改善策（救済策）」へと筆をすすめる。

マルクスは五つの「救済策」に論及し、貯蓄組合制度や産業教育という「救済策」の吟味に続いて、次のようにのべる。「しかし、われわれは第三案に議論をすすめるべきではない。それは実際に、非常に重大な結果をひきおこしている、——すなわちマルサス理論」<sup>16</sup>と。この一節は貯蓄組合制度や産業教育についての論評を踏まえてのべられたものであるが、「マルサス理論」批判の重要性（緊要性）が特別に強調されている。このことは、われわれの如上の展開からも容易に理解できることである。したがって、ここでのマルサス批判は理論的であるのみならず、時論的性格をも併せもっているといえよう。次にその要点について検討するとしてよう。

マルクスはまず、「この理論全体は、われわれがここで考察しなければならないかぎりでは、要するに次のとおりである」として、組上にのせるマルサスの所論を整理して次のように開示している。

賃金の高さは、供給される働き手と要求される働き手との比によって決まる。

賃金は二重の仕方増大しうる。

労働を働かせる資本がきわめて急速に増加し、そのため労働者にたいする需要が供給よりも急速に

——もっと速い速度で増加する場合か、

または、第二に、生産的資本が急速に増加しないが、人口の増加が緩慢なために、労働者間の競争が依然として弱い場合。

この関係の一方の面、すなわち生産的資本の増大にたいしては、君たち労働者はなんの影響もおよぼすことはできない。

これに反し、他の面にたいしては、大いにできる。

君たちは、できるだけわずかしき子供をつくらないことによって、労働者の供給、すなわち労働者間の競争を、減らすことができる。<sup>17</sup>

マルクスの整理は簡潔に過ぎており、また参照もしていないので、ここで改めてマルサスの『経済学原理』を紐解くと、「労働の賃金について」と題する一章がみいだされる。その冒頭においてマルサスは、「労働賃金とは、労働者に、かれ自身の骨折りのために支払われる報酬である」<sup>18</sup>と定義した上で、その「報酬」の大きさ（価格）について次のようにのべている。「労働の貨幣賃金は、労働の需要および供給に比較した、貨幣の需要および供給によって決められる」<sup>19</sup>と。したがって、その変動は「労働の供給」と比較した「需要の変動」によって規制されることとなる。つまるところ、「労働の価格」の「主な規制者」は「労働の生産費」ではなく、「労働」の需要供給の原理にほかならない<sup>20</sup>。

こうした見地からマルサスはD.リカードの「労働の自然価格＝生存費」説を批判する。リカードによれば、「労働は、売買され、また、分量が増減される他の物と同様に、その自然価格と市場価格とをもっている。労働の自然価格は、労働者たちが、平均的にみて、生存し、彼

<sup>16</sup> 同前、531ページ。

<sup>17</sup> 同前、同ページ。

<sup>18</sup> T.R.Malthus, *Principles of Political Economy: Considered with a View to their practical Application*, London, 1920, p.240. 小林時三郎訳『経済学原理』（下）、岩波文庫、1968、9ページ。

<sup>19</sup> *Ibid.*, p.240. 小林訳（下）、同ページ。

<sup>20</sup> *Ibid.*, p.241. 小林訳（下）、10ページ。

らの種族を増減なく永続することを可能にするのに必要な価格である。」<sup>21</sup>（下線は仲村）ここでは労働者本人のみでなく、「彼らの種族」の生存費を含めている点については、われわれは直ちにマルクスの労賃論を想起するのであるが、ともあれ、労働の価格（賃金）は専ら「労働」の需要供給の原理によって規制されるとするマルサスにとって、市場価格と区別されて措定された「自然価格」なるものは到底受容できるものではなかったのである。

既にみてきたように、マルサスは『人口論』において、一方に生存手段（生活手段）の増加率（算術級数）を他方に人口の増加率（幾何級数）を対置するのであった。その相関関係はここに至り——『経済学原理』において——資本による労働〔労働力〕への需要の大きさと労働者による労働〔労働力〕の供給の大きさとの関係に置き換えられる。前述のようにストレートに——生存費については一顧だにせず——、賃金の高さは「供給される働き手と要求される働き手との比」によって決まるとするのである。マルサスによれば、リカードの「自然価格」は「自然の事態」にあっては、数百年ものあいだに生じないのであって、これはむしろ「不自然な価格」と呼ぶべきものである。

もちろん、マルサスは賃金の高さを規定するに当たって労働の生産費について「一顧だにせず」といえども、生活手段と賃金との関係に触れざるをえないのであって、マルサスはこれについては価格変動のレベルにおいて論及し、次

のようにのべる。「生活必需品の価格が労働の価格にかくも重大な影響を与えるのは、供給の条件としてである。これらの必需品のある部分は、労働者が停止人口を維持するために、より大きな部分は逡増的人口を維持するために、必要である。したがって、生活必需品の価格がどうであろうとも、労働者の貨幣賃金は、かれがこれらの部分を購買できるものでなければならない。そうでなければ、供給はおそらく必要な分量だけおこりえないのである。」<sup>22</sup>（下線は仲村）この叙述は明らかに自己撞着に陥っているといわざるをえないのだが、マルサスはこの「供給の条件」についてどのように展開しているのであろうか。

マルサスはこの点に論及するにあたり先ずもって、リカードの「自然価格」に対して自らの定義を提示して次のようにのべる。「ある国の労働の自然価格または必要価格は、『どの国にあってても現実の諸事情のもとで、労働者の平均的需要と一致するに十分な平均的供給をもたらすに必要な価格』である……。市場価格は……市場における現実の価格である……」<sup>23</sup>と。そして、筆を飛ばして走らせ、「社会の労働階級の状態」を俎上にのせる。この「社会の労働者の状態」はわれわれの文脈において看過できない論点を含んでいるので、ここで簡潔に吟味するとしよう。

マルサスによれば、「社会の労働階級の状態」は、一部分はその国の資源と労働にたいする需要とが逡増しつつある比率に、また一部分は衣

<sup>21</sup> D.Ricardo, *op.cit.*, p.93. 上羽鳥卓也・吉沢芳樹訳（上巻）135ページ。

<sup>22</sup> T.R.Malthus, *op.cit.*, p.241. 小林訳（下）、10ページ。訳語の「貨幣賃銀」は「貨幣賃金」に改めた（以下、同様）。なお、リカードはこのくだりについての評注において、「供給を規制するものこそが価格を規制するのである」と批判している（小林訳（下）、11ページ）。

<sup>23</sup> *Ibid.*, p.247. 小林訳（下）、18ページ。訳は一部変えた。

食住についての人民の習慣に、明らかに依存しているにちがいない。』<sup>24</sup>（下線は仲村）このくだりを一読して、われわれはリカードの次のような叙述との類似に刮目せざるをえない。リカードはのべる。「労働の自然価格は、食物と必需品で評価しても、絶対的に固定不変なものとして理解してはならない。それは同じ国でも時代が異なれば変化し、また国が異なれば大いに異なる、それは本質的には人民の習慣と風俗に依存している。』<sup>25</sup>（下線は仲村）上のマルサスの一文は明らかに、リカードのこの叙述に依拠しているとみてよいが、両者の間には違いもみられる<sup>26</sup>。この点についてはさしあたり措くとして、ここでわれわれの文脈において刮目されるのは、マルサスにあっては、生活様式を規制する主な「原因」として「道徳的原因」が特別に強調されているということである。

マルサスによれば、生活様式は気象や土壌などの「物理的原因」よりも、「道徳的原因」に依存するという。そして、マルサスは人口の増大という結果をもたらす「習慣」を何よりも「品性」の問題として論ずるのであるが、ここでいうマルサスの「品性」とは「過去から未来へと推論する能力と意志」の謂いであり、つまるところ「慎重の習慣」にほかならず、件の“道徳的抑制”を暗示するものといえよう<sup>27</sup>。

この点に関するマルサスの叙述もまた整序的ではなく、捉えがたいのであるが、マルサスの主張するところは、アイルランドの事例をとり

あげるとき、きわめて明確である。マルサスは次のようにのべる。「ジャガイモがこの国にもち込まれたため、社会の下層階級は、かれらが食物、しかももっとも低廉な種類の食物を獲得しうるかぎり、あらゆるほかの欠乏にさらされる見通しのもとにあってさえも結婚するというように、窮乏と無知の状態にあり、他の人びとから尊敬を払われることもほとんどなく、したがってまた、自尊心などもほとんどもち合わせていなかったのである。……労働維持のための豊富な基金は、……もっぱらよくみかける大家族の維持のためについやされてしまった。そしてその結果は、労働貧民の一般的状态および生活様式にほとんどまたはなんの改善をとまなわないところの、もっとも急速な増大となったのである。」<sup>28</sup>（下線は仲村）下線部分に指目するとよい。マルサスは「品性」の欠如による結婚は労働貧民の生活改善にとって障害になるだけでなく、人口の増大を結果すると結論づけている。そして、そうした結婚を黙示的に論難するのである。

この一節に続いて、イギリスとの対比についてのべられているが、このことについては措くとして、別の箇所においてマルサスはさらに敷衍して、次のようにのべる。「名目的な賃金と人口の増進とのこの不一致は、救貧法（poor law）が制定されそして労働者の賃金の一部を教区税（parish rates）から支払うのが習慣となっている国々においては、さらにいっそうひ

<sup>24</sup> *Ibid.*, p.248. 小林訳（下）、同ページ。

<sup>25</sup> D.Ricardo, *op.cit.*, pp.96-97. 『経済学および課税の原理』（上巻）羽鳥卓也・吉沢芳樹訳、前出、139ページ。

<sup>26</sup> この問題はマルサスにあっては、「一部分は」とあるように、限定的に捉えられているのに対して、リカードのばあい、歴史的变化において、また国と国との比較のうちに捉えられている。

<sup>27</sup> マルサスはこの「品位に役立つもの」として「市民的および政治的自由」と「教育」とをあげている（T.R.Malthus, *op.cit.*, p.251. 小林訳（下）21-22ページ）。

<sup>28</sup> T.R.Malthus, *op.cit.*, pp.252-253. 小林訳（下）、23ページ。



どくなるであろう。……ひとたび人民がこうした制度に慣れ親しむと、教区の補助を別にした労働の賃金が妻と子供一人とを養うにやっと足りるか、または妻も子供もないたったひとりを養うに足りるだけであるときにも、人口の増大はきわめてすみやかであろう、なんとすれば、結婚にたいする奨励と子供を扶養する手段のどちらもお存在するからである。」<sup>29</sup>（下線は仲村）こうした叙述からわれわれは直ちに『人口論』における“道徳的抑制”を想起するであろう。

マルクスが手稿『賃金』において俎上にのせるのは、こうしたマルサス賃金論における需要供給説である。これはマルサス人口論におけるひとつの論点である。マルクスの展開は必ずしも整序的とはいえないが、叙述に即してみると、まず、生産的資本の増大にともなう、労働〔労働力〕の増大——供給の増大よりも大きな——についてのマルサスの所論が俎上にのせられている。何よりもまず、賃金上昇における一つの「主要条件」としての生産的資本の増大——できるだけ「急速な増大」——について吟味する。マルクスはこの「条件」なるものは、同時に、労働者の状態をブルジョア階級に比べてますます低下させ、彼の「敵の力」を増加せしめる条件にはかならないことを剔抉する。つまり、労働者は自分自身の「敵対する力」をつくりだし、それを強めると説くのである。マルクスはこのような関係を「倒錯した関係」<sup>30</sup>と呼び、まさしくそうした関係性における生産的資本増大の諸結果を解明するのである。

ここでマルクスは端的に、「資本の増大＝資

本の蓄積と集積」という定式を示し、「蓄積」および「集積」の概念を指定する。ただし、この概念はここでは敷衍されていないが、後の資本蓄積論の先駆けとして刮目される。ともあれ、マルクスは「資本が蓄積され、集積されるのに正比例して、次のようになる」<sup>31</sup>として、蓄積過程における分業の進展と大規模な機械、さらには新しい機械の導入を特別に強調している。こうして資本蓄積論は生産力の増大（生産の大規模化）という視点から展開されているという点において特徴的である。

そして、労働〔労働力〕の需要・供給をめぐる問題に視点を据え、もっぱら競争論として展開する。まずマルクスが強調するのは、労働者間の競争の「増大」である。ひとつには、機械の導入による労働の単純化は労働者間の競争を激化させるということ、ふたつには、資本の蓄積と集積の進展による資本間の競争が小資本家の零落と労働市場への参入をもたらし、かくして労働者間の競争を拡大するというのである。

さらにマルクスは、生産力の増大に伴伴する「労働の規模」の増大から短絡的に、過剰生産の必然化、すなわち世界市場における競争の普遍化と恐慌の激化とを説く。また、新しい恐慌のたびごとに直接に、労働者たちのあいだに「前よりはるかに大きな競争」がひきおこされるとのべている<sup>32</sup>。そして、こうした諸関連は次のようにまとめられる。「生産力が増大すると、大資本の支配が増大し、労働者と呼ばれる機械の愚鈍化と単純化が増大するし、また分業と機械の使用の拡大や、文字通りに人間の生産

<sup>29</sup> *Ibid.*, pp.258-259. 小林訳（下）、32ページ。

<sup>30</sup> 『マルクス・エンゲルス全集』第6巻、前出、532ページ。

<sup>31</sup> 同前、同ページ。

<sup>32</sup> 同前、533ページ。

に奨励金が与えられていることや、またブルジョア階級のうち没落した部分の競争などによって、労働者間の直接の競争も増大するのである。』<sup>33</sup> こうしてマルクスは、生産力の増大が労働者間の競争を激化させるという側面を強調する。かかる展開は、生産力の増大をストレートに労働〔労働力〕への需要の増大と結びつけるマルサスへの批判であり、これが第一の論点である（マルクス自身はこのように整序してはいないのだが）。

この論点を踏まえてマルクスは、生産的資本の増大のなかで賃金に当てられる部分〔可変資本の大きさ〕について、これを生産手段に転化される部分との相互関係において吟味し、次のような結論を導きだしている。すなわち、「生産的資本、すなわち資本そのものの力が増大すればするほど、それと同じ程度で、原料および機械に投下される資本と賃金に前払いされる資本との不均衡が増大する。すなわち、こうして、生産的資本のうち賃金にあてられる部分は、資本のうち機械および原料としてはたらく部分にくらべて、ますます小さくなるのである」<sup>34</sup>と。

みられるとおり、ここでマルクスは、後に「資本の有機的構成」として概念化される事象に論及しているのであるが、刮目すべきは、この「資本の有機的構成」の高度化は労働者間の競争を「激化」させるとしている点である。この過程についての説明の仕方はやや曖昧であるが、われわれはさしあたり、次の叙述を参照すべきであろう。マルクスは次のようにのべる。「一言でいえば、生産力の増大は同時に労働者

とその雇用との不均衡を増大させるのである。これは、生活資料が増加するかどうかということとも、またそれ自体として考えた人口が増加するかどうかということとも、かわりがない。それは、大工業の本性および労働と資本との関係から、必然的に生じるのである。』<sup>35</sup>（下線は仲村）

この現象もまた後に明確に解析されるのであるが、それは「相対的過剰人口」の存在と関連づけられており、『資本論』における相対的過剰人口論の萌芽がここにみいだされる。他方において、この連関は具体的には生産的資本の増大とともに「雇用手段あるいは生活資料が相対的にますます減少する」、あるいは、「雇用手段にくらべて労働人口がいよいよ急速に増加する」というように捉えられている。そしてこうした状態を「不均衡」と表現し、これは算術級数的にではなく、幾何級数的に「ひどくなる」とのべている<sup>36</sup>。なお、マルクスのいう、上の引用文にみられる「それ自体として考えた人口」は、この稿に続く別稿において改めて言及する。

こうしてみると、生産的資本の増加はストレートに労働（労働力）への需要の拡大をもたらすと説くマルサスへの批判は、ある意味において、マルクス自身の理論の成熟過程を示すものとしても刮目される。この点についてはさしあたり措くとして、結局するに、マルサス批判の核心は次の叙述のなかにみることができよう。マルクスはひとつの結論として、次のようにのべている。「こうした法則は、まったく労働者の資本にたいする関係から生じるものであり、したがって生産的資本の

<sup>33</sup> 同前、同ページ。

<sup>34</sup> 同前、534ページ。

<sup>35</sup> 同前、536ページ。

<sup>36</sup> 同前、533ページ。

急速な増大という、労働者にとってもっとも有利な事情をさえ、かえって不利なものにしてしまうのだが、ブルジョアたちは、社会的な法則であるこの法則を自然法則に変えてしまって、人口は自然法則に従って雇用手段または生活資料よりも急速に増加するのだ、と説くのである。生産的資本の増大のなかにこうした矛盾が含まれている、ということが彼らにはわからなかったのである。<sup>37</sup>（下線は仲村）

マルクスはここに、人口法則はひとつの「自然法則」にほかならないとするマルサスの立論を誤謬とした上で、これに対置して「社会法則」を措定し、自らの方法論的立場を提示しているといえよう。ただし、ここで留意すべきは、マルサスの「自然法則」を祖上にのせるのは、手稿『賃金』が最初ではないということである。これに先立ってマルクスはひとつの評論において、この「自然法則」に言及しているのである。マルクスは、イギリスにおける貧困と救貧法をめぐる議論を論評するなかで、マルサス人口論における「自然法則」が当時の「市民社会」において果たしている役割を別括している。

マルクスはのべる。「国家は社会制度である。国家が社会的弊害を認めるかぎりでは、国家はそれを人間の力のおよびえない自然法則にもとめるか、国家から独立した私生活に求めるか、あるいは国家に依存する行政の不適切にもとめるか、どれかである。こうしてイギリスは、貧困の原因を、

人口はつねに生活資料を上回るほかないという自然法則のなかにみている」<sup>38</sup>（下線は仲村）と。このようになるのも、マルクスによれば、市民社会にあっては、行政の「無力」がひとつの「自然法則」にほかならないからである。というのも、市民社会の「分裂性」「卑劣さ」「奴隷状態」が近代国家をささえている「自然的基礎」にほかならないからであり、こうして、「社会的欠陥の一般原理」を把握する「政治的理解力」が欠如することになるという<sup>39</sup>。

ここにみられる国家論——マルクスはこれを「政治的国家」と呼んでいるのであるが——は明らかに、この評論の少し前に執筆された『ヘーゲル法哲学批判序説』（1843末—1844.1に執筆）における所論の延長線上にあるといえよう（ここにもマルクス国家論の一断片がみいだされる）。イギリスにおいては、新救貧法の制定をめぐる論争のなかで、貧困問題に関する賑々しい議論が繰り広げられたのであるが、上に引いたマルクスの一文もこの辺りの議論にふれたものであり、「政治的国家」や議会は「政治的理解力」を欠き、「無能」であるため、「貧困の原因」を把握できない<sup>40</sup>と喝破しているのである。こうした評定はいうまでもなく、ひとつのイデオロギー批判にほかならない。

このようにマルクスは、この評論において、「人口はつねに生活資料を上回るほかない」という虚偽意識が国家によって生みだされることの根拠を

<sup>37</sup> 同前、535-536ページ。

<sup>38</sup> K.マルクス「論文『プロイセン国王と社会改革——プロイセン人』（『フォルヴェルツ』第六〇号）にたいする批判的論評」『マルクス・エンゲルス全集』第1巻、438ページ。

<sup>39</sup> 同前、438-439ページ。

<sup>40</sup> 併せて、次の叙述を参照のこと。「国家が強力であればあるほど、したがってある国が政治的であればあるほど、その国家の原理のうちに、つまりその国家を自己の能動的で自覚的で公的な表現とする現行社会制度のうちに、社会的欠陥の原因をもとめたり、社会的原理の一般原理をつかんだりすることを、ますますしなくなりがちである。」（同前、439ページ）

別決しているといえよう。一方、手稿『賃金』においては、この虚偽意識の理論的基礎ともいうべき、マルサスの「理論」（「経済理論」）——「経済学的であると同時に現実的な（博学的な）基礎」（既引用）——を祖上にのせているのである。われわれはここに、マルクスのマルサス人口論への理論的批判の端緒をみいだすことができよう。

ところで、マルサスの「自然の法則」はすでに触れた（本稿シリーズ [5] 29ページ）“自然の饗宴”や“自然の命令”をも含む概念とみなしうるのであるが、この「自然の法則」に対する批判はマルクスに先行して、マルサスの同時代人によって厳しく批判されているのである。このうち“自然の饗宴”や“自然の処罰”の残忍性については、W. ゴドウィンによる辛辣な批判に先に触れておいたが（本稿シリーズ [4]）、前述のコベットもマルサスの「自然法則」についてアイロニーを込めて批判の矢を放っている。コベットは戯曲『過剰人口』において、登場人物たちの素朴な会話をとおしてマルサスの「自然法則」の非論理性を批判させ<sup>41</sup>、「愛の自然法則」なるものを措定しつつ、“道徳的抑制”を批判している。

同じくマルサスの同時代人であるW. ハズリットは次のように、マルサスのいう「自然法則」について鋭利な批判を加えている。「……彼〔マルサス〕は彼ら〔貧しき者〕にたいし、経済、道徳、彼らの欲情（彼は別の場合において、それをいかなる抑制にも服しないものだと言う）の調節、そして、『神の法則であるところの、自然の法則は、彼らと彼らの家族とを、彼らの労働が供給し、も

しくはどれか慈善的な手が同情して差し出すかも知れないところのもの以上の、最少量の食物への権利をもたないために餓死するように運命づけた』という不快な話題について説く。これは偏狭であり、哲学的ではない。それに、彼が訴える自然の法則ないし神の法則は、局限された豊饒と局限された土地という以外にはない。これらの限界内においてはその余のことは人間の法則によって調整されているのである。土地の生産物の分配、労働の価格、貧民に与えられる救済は人間の取り決める問題である。」<sup>42</sup>（下線は仲村）

みられるとおり、ハズリットはこの一節において、人智のおよばない、抗い難い「自然の法則」（「神の法則」）なるものを措定して、＜貧困・飢餓＞を運命論的に説明するマルサスに異を唱えているのである。ハズリットによれば、「自然の法則」は「局限された」豊穡と土地——いずれも生存手段に関わるのだが——に対して作用するにすぎないのである（この論述は俄かには首肯しがたいのだが）。このことを言い換えれば、「自然の法則」は限定的には認められるということであるが、他方、「土地の生産物の分配」「労働の価格」「貧民に与えられる救済」などについては、この法則は作用せず、それらは「人間の法則」によって調整されるのである。つまり、こうした問題領域は、われわれ流に言えば、人間の社会的関係性の問題（社会的・経済的諸問題）にはかならないのだが、ハズリットにあっては、人間自身が主体的に「取り決める」ことのできるもの（取り決めなければならないもの）とされ、そして、ここにはひとつの

<sup>41</sup> 次の会話を参照のこと。「……全ての国で、生きていくのに必要な食糧より人口の力が早く増大していくことは自然の法則ではないのか」「それが果たして事実でしょうか、理性や経験からいっても、そうしたことを主張することは神を冒瀆するものです。もし自然のなかにそのような傾向があるのなら、どうしてそれ以前にそれが発見されなかったのですか。」（福土正博稿〔前出〕193ページ）

<sup>42</sup> W. Hazlitt, *The Spirit of the Age : or Contemporary Portraits*, Second Edition, S. and R. Bentley, 1825. pp.243-244. 神吉三郎訳『時代の精神』日本評論社、1949、214ページ。訳は一部変えた。

法則（「人間の法則」）が貫くというのである。

したがって、ハズリットの「人間の法則」はマルクスのいう「社会法則」によって置き換えることのできるものであるが、この「人間の法則」の独自性は人間の能動性に力点をおいて概念化されているという点にある。だが、この「人間」が社会的諸関係にある人間——社会的に（歴史的に）規定された人間——を些かも含意するものではないとすれば、それはひとつの観念論というほかない。ハズリットは恐らく、先にマルクスから引いた「人間の力のおよびえない自然法則」に類する「自然」——抗い難い「自然」——に対して、これに抗することのできる人間の主体性を強調したいのであろう。

因みに、マルクスのマルサス批判のなかに、「人間の自然的諸法則」という概念がみいだされる。すなわち、「[人口の歴史的諸法則は] たしかに人間の自然の歴史だから自然的諸法則ではあるが、ただし、規定された歴史的発展にもとづいた人間の自然的諸法則なのであって、それは、人間自身の歴史過程によって〔条件づけられた〕、限定された生産諸力の発展をともなっているのである」<sup>43</sup>と。ハズリットとの違いは明らかである。マルクスにおいては徹底して歴史的・社会的視点が貫いている。「自然法則」の捉え方の違いは自然概念をどのように理解するかという見地の違いをも反映していよう。いずれにせよ、マルサス批判は異なる視点から可能であることがここに示唆されて

いるのである。

周知のように、「自然」についての観念は異なる歴史段階において、また東洋と西洋の間において相違するのであるが——この点についてここでふれる余裕はない<sup>44</sup>——、ハズリットにあっては、この「自然」は単純にいわゆる外的自然を指示しているようだ。したがって、自然の法則における「人間の力のおよびえない」という側面に即して、マルサスの「自然の思想」を批判しているとみることもできよう。

だが、われわれの文脈において指目すべきは、当時のイギリスにおいて流布していた、もうひとつの自然思想である。この点については、次のようなB.ウィリーの叙述が参考になろう。ウィリーはのべる。「……〈自然状態〉の観念は、とくにロック以後は、一手段として、すなわち新しい支配階級が、それによって旧来の封建的、教会的秩序のなおも残存する諸制約に対して自らの個人的自由と財産との大切な諸権利を擁護する一手段として、用いられるようになった」<sup>45</sup>と。如何にも、マルサスの「自然の法則」をこの論述に照らし合わせてみると、首肯できる一文である。

さらに、“剽窃”と紛うほどにマルサスがその所論に大きく依拠している、J. タウンゼンドについてみるとよい。ウィリーの叙述がより鮮明に引証されよう。タウンゼンドは次のようにのべている。「貧民がかなり先見の明がなく、地域社会において最も奴隸的で最も不潔で最も卑しい役目を果た

<sup>43</sup> K.マルクス『1857-58年の経済学草稿』Ⅱ（前出）332ページ。

<sup>44</sup> 自然概念については、さしあたり次の書を参照のこと。R.G.コリングウッド『自然の観念』平林康之・大沼忠弘訳、みすず書房、1974。T.H.ハックスリ/R.G.コリングウッド/メルローポンティ『自然の哲学—自然の中の人間と人間の中の自然—』御茶の水書房、1981。伊東俊太郎『自然』三省堂、1999。マルクスの自然概念については、A.シュミット『マルクスの自然概念』元浜清海訳、法政大学出版局、1972、参照。

<sup>45</sup> B.ウィリー『十八世紀の自然思想』三田博雄ほか訳、みすず書房、1975、18ページ。原書：Basil Willey, *The Eighteenth Century Background ; Studies on the Idea of Nature in the Thought of the Period*, Chatto And Windus, London, 1940.

す人々が常に存在するという事は、ひとつの自然法則 (a law of nature) であるように思われる。人類の幸福の蓄えはこのことによってますます増加し、より上品なびとは骨折り仕事から免れ、また彼らを惨めにする、時々の雇われ仕事からも解放されて自由になり、なにも煩わされることなく、彼らのさまざまな気質に合い、国家のために最も有益な職業に従事するのである。……〔最も貧困な層にあっては〕空腹が感受されるか、その恐れがあるとき、パンを得ようとする強い欲望のため、最も大きな苦難にもひそかに耐えるであろうし、また、最も厳しい労働も和らげられよう。……／〔救貧法は〕神と自然とによってこの世界に確立した制度の調和と美、均衡と秩序を破壊することになる。」<sup>46)</sup> (下線は仲村)

この一節の意味するところについては、改めて注釈を加える必要もないが、敢えて付言すれば、神と自然によって与えられた凄まじい状況がひとつの「美」として「賛美」されているという点は看過できない。こうした言説はウィリーのいう「大切な諸権利を擁護する一手段として用いられている」という叙述と符合しており、ここには当時の支配層のイデオロギーが露わに表出しているといえよう。いずれにせよ、われわれの文脈において肝要なことは、ここにみられる「残忍性」についても、これをマルサスはそっくり継承している——“剽窃”している？——ということである。

なお、マルサス人口論における重要な論点のひとつである道徳的抑制については、この手稿は次

のように軽く触れているにすぎない。「労働者全体が子供をつくらぬ決心をするというような、できもしないナンセンスは論外である。それどころか、彼らの状態は、性的衝動を主たる享楽とし、しかもそれにかたよって発展させる」<sup>47)</sup>と。この言説は、先に引いた叙述、ななわち「労働者は子供をつくらぬことによって需要〔正しくは「供給」〕を減少させることができる、ということにほかならない」とする叙述を踏まえたものとみることができよう。マルサスは労働者の側の供給の制限については、専ら「道徳的抑制」の必要を強調していることは前述のとおりであるが、労働者の需要・供給の法則的展開のなかにこの「道徳的抑制」を持ち込むことは、E.J.ホブスボームも指摘するように<sup>48)</sup>、「性的決定要因という個人的な要因を社会現象とみなしている」ことになる。因みに、エンゲルスは共産主義社会においても過剰人口の「抽象的可能性」が存在するが、この社会は人口増加の制限を成し遂げることができる<sup>49)</sup>。そのばあい、「大衆の教養」が「道徳的抑制」を可能にするとのべている<sup>50)</sup>。未来社会における道徳的抑制にかかわるこうした言説は、現存社会（資本主義社会）における「道徳的抑制」——マルサスの主張する——を徹底的に批判するマルクスの見地との異同が刮目される所であり、また、いわゆる産児制限問題に関わるひとつの論点をなすのであるが、ここでこの点について敷衍する余裕はない（別稿において改めて触れることになる）。

<sup>46)</sup> J. Townsend, *A Dissertation on the Poor Laws*, 1786, Sect. XII

<sup>47)</sup> 『マルクス・エンゲルス全集』第6巻（前出）536ページ。

<sup>48)</sup> E.J. Hobsbawm, *The Age of Revolution: Europe 1789-1848*, ABACUS, 1977, p.344. 安川悦子・水田洋訳『市民革命と産業革命——二重革命の時代——』岩波書店、1968、472ページ。

<sup>49)</sup> F. エンゲルス「カール・カウツキーへの手紙」〔1981.2.1付〕（『マルクス・エンゲルス全集』第35巻）124ページ。

<sup>50)</sup> F. エンゲルス『国民経済学批判大綱』（『マルクス・エンゲルス全集』第1巻）、565ページ。

マルクスは以上のように、マルサス人口論について縷々吟味するのであるが、総括的な結論とみなされるのが、次の一文である。マルクスはのべる。「……上述の理論は、人口は生活資料よりも急速に増加するというように、このんで自然法則として表現されるが、この理論は、ブルジョアの良心の呵責をしずめ、冷酷を彼の道徳的義務とし、社会現象を自然現象とするからこそ、また最後に、ブルジョアにプロレタリアートが飢えの苦しみのために破滅するのを、ほかの自然現象と同じように平気な顔で心を動かされることなく傍観することを可能にし、他方では、プロレタリアートの貧困をプロレタリアート自身の罪と見て、これに罰をくわえることを可能にするからこそ、いよいよもってこの理論がブルジョアの気にいっているのである。プロレタリアは、理性によって自然的本能の手づなをひきしめ、道徳的な監視によって自然法則の有害な展開を抑えることができるはずだ、と言うのである。」<sup>51</sup>

みられるとおり、マルサスの人口論は当時の支配階級の利益に適合した「理論」であると厳しく評定している。マルクスのマルサス批判の帰結するところはこの点にあるといっても過言ではない。実際のところすでに触れたように、マルサスはフランス革命後の反動化に棹さしつつ、自己責任論にもとづく〈過剰人口と貧困化〉を説き、失業者の生存権を否定したのである。このことに加えてマルサスは、労働日の延長を主張し、俗流的な労働市場論・賃金論を展開した。このことはマル

クスが随所で言及しているように、明らかに、資本の利益をあからさまに代弁するものであり、ここには固有のイデオロギー的立場が赤い糸として貫いているといえよう。

しかしながら、手稿『賃金』は理論的にはまで未成熟な段階の論稿であるという点をここで改めて確認しておく必要がある。先ず指摘すべきは、労働力範疇の形成は『資本論』を俟たねばならなかったということである。<sup>52</sup>したがって、ここではマルサスと同じレベルにおいて労働範疇によって議論が展開されており、その結果として、マルクスは労働〔労働力〕の需要供給説への批判に力点をおくこととなったものといえよう。さらにいえば、マルクスはマルサスの賃金論に閑説しながらも、そこにみられる生存説批判——リカード批判——に言及することもなかったのである。こうした点に限定していえば、エンゲルスの『国民経済学批判大綱』におけると同様に、競争論に視点がすえられ、しかも、生産力の増大という点に視点を据えて議論を展開しているということである。

このように、手稿『賃金』における理論展開はなお未成熟であるとはいえ、後の『資本論』に通じる論点が鏤められている。繰り返すことになるが、「資本の有機的構成」「相対的過剰人口」などについて、概念化されていないとしても、素朴な形で論述されているのである。人口理論に限っていえば、マルクスの人口論研究は1840年代半ばと推定されるが、この手稿に次いで50年代初頭に人口に関する多くの文献を蒐集し検討しており<sup>53</sup>、

<sup>51</sup> 『マルクス・エンゲルス全集』第6巻（前出）537ページ。

<sup>52</sup> 労働力範疇の形成過程については次の論稿を参照のこと。高木幸二郎『『経済学批判要綱』における「資本と労働の交換」について——商品としての「労働力」範疇の生成——』経済学史学会編『資本論の成立』岩波書店、1967、所収。

<sup>53</sup> 1950年9月-53年8月に作成された「ロンドン・ノート」には、J.タウンゼンドほかの人口論に関わる文献からの抜粋が記録されている（森下宏美『『ロンドン・ノート』における人口論研究』『経済』2002年6月号、参照）。

得られた知見は以下に閑説する50年代の経済学草稿に生かされているのである。こうして、以降のマルサス人口論批判の基本線はこの手稿における所論をベースにしているとみることができよう。

ここで再度強調すべきは、このような過程にあっては、マルクス固有の思想と理論（科学）とが織り成して展開されているということであるが、いま一度俯瞰してみると、手稿『賃金』は1840年代後半におけるマルクスの思想形成の「終結点」とみなす評定<sup>54</sup>も首肯できよう。

### (3)

以上の論述を踏まえて次に、『1857-58年の経済学草稿』におけるマルサス人口論批判について簡潔に検討するとしよう。

本稿の冒頭に掲げた一節は、マルクスが『1857-58年の経済学草稿』において、マルサス人口論への批判をコンパクトに凝縮して論述した部分から引いたものである。マルクスのマルサス人口論への関心——「重要である」とする論点——が奈辺にあるかがここに窺がえる。マルサスの人口理論は「ふたつの面から見て重要である」としながらも、この『1857-58年の経済学草稿』にあっては、批判的専ら過剰人口の歴史的な性格を理解しないマルサスの所論に絞られている。そして、これに対応させながら同時に、自らの視点・所論を開示しているのであるが、ここで刮目すべきは、視点・所論の展開のなかに、マルクス自身の人口論の方法が黙示的に語られているということである。こうした点を確認して以下、論点を整理しながら吟味するとしよう。<sup>55</sup>

マルクスのマルサス批判について整理すると、ひとつには、マルサスの誤謬の由って来たところを明らかにすることであり、ふたつには、マルサスの「理論」に対応して、マルクス自身の所論を簡潔に提示することである。

マルクスはマルサスの過剰人口論は「子どもじみている」とし、その原因として挙げているのは、次のふたつである。まず、経済的発展のさまざまな歴史段階における過剰人口を同じものとみなしていること、また、「複雑で変化に富む諸関係」をひとつの關係に還元していることである。つまり、「人間の自然的繁殖」と「植物（生存手段）の自然的繁殖」とをふたつの「自然的な数列」（〔幾何級数と算術級数〕）に還元し、対峙させているということである。

こうした方法はマルクスによれば、歴史的に異なった諸関係をひとつの抽象的な数列に転化することにほかならないのである。そして、「自然的過程」である人間の「増加」が幾何級数的に進行するためには、「外的な抑止、抑制」——これは明らかに、いわゆる「道徳的抑制」を含意すると思われる——を必要とするという。これはまさしく、マルサスのいう「人間の自然的な繁殖過程」にほかならない。

マルサスの「人口理論」の核心的部分のひとつ——件の命題にかかわる論点——をこのように解析した上でマルクスは、これに縋いあわせながら自らの所論を極めて簡潔に展開していく。マルクスがこうした「理論」にたいしてわけても強調するのは、人口および過剰人口は歴史的諸関係によって規定されるということであり、マルサスのように、生活手段の生産性の「絶対的限界」によっ

<sup>54</sup> 渋谷正「経済学批判と唯物史観（1840年代）」服部文男・佐藤金三郎編『資本論体系』第1巻、有斐閣、2000、62ページ、参照。

<sup>55</sup> 『1857-58年の経済学草稿』（『草稿集』）Ⅱ（前出）331ページ以下、参照。



て規定されるのではなく、「一定の生産諸条件によって規定された限界」によって規定されるということである。他方、人間の「繁殖過程」は、「マルサスの自然人」のように、「外的な諸制限」に条件づけられるのではないのである。人口と過剰人口のいずれも、内在的に条件づけられるのである。

また、マルサスは人口と生存手段（生活手段）の量的連関性について、「決まった量」の人間と「決まった量」の生活手段とを連関させているが、これに対してマルクスは、リカードの異論を引証しつつ、次のようにのべる。「リカードがただちに次のように異議を唱えたのは正当であった。すなわち、仕事がないならば、現存する穀物の量などは労働者にとってまったくどうでもよいことである。つまり、労働者を剰余人口の範疇に入れたり入れなかったりするの、雇用手段であって生存の手段ではない、と。しかし、このことはもっと一般的にとらえられなければならないのであって、そもそもこのことは、個人が自分の再生産の手段に連関し、またこの手段をつくり出すことを可能にする社会的条件に、したがって生産諸条件とこの条件への個人の関係と連関しているのである。」<sup>56</sup>と。

この一節において刮目されるのは、マルクスはリカードの所論から一步すすんで「もっと一般的に」捉えなければならないとして、労働者ではなく、「個人」を措定しているということである。このことはどのように理解できるのであろうか。マルクスの論述にはある種の飛躍が認められるのであるが、次のように理解することも可能であろう。マルクスはアテネの奴隷に言及して「剰余奴隷」なるものは存在しないといい、「剰余労働者、す

なわち労働する無所有の人間の発明は、資本の時代に属するのである」<sup>57</sup>（下線は仲村）とのべている。この一文から推して、過剰人口はマルサスのように「決まった量」の生存手段（生活手段）との連関において論ずるのではなく、諸個人自身の「再生産」の条件の問題として捉えた上で、その条件の歴史性と特殊性とを析出すべきである——これがマルクスの主張するところであろう。こうして、マルクスは結論的に次のようにのべる。「生存手段のありもしない絶対量にたいする関係なるものはどこにもないのであって、あるのは、再生産の諸条件にたいする、生存手段の生産条件にたいする関係である。」<sup>58</sup> ここでいう「生存手段の生産条件」はいうまでもなく、歴史的に規定された生産条件である。資本主義社会にあつては、「労働する無所有の人間」〔労働者〕と資本家との関係、すなわち資本・賃労働関係における諸条件にほかならない。

なお、結びの部分に「非労働者からなる剰余人口」「相対的剰余人口」という言葉がみいだされるが、ここではその歴史的な性格を端的に強調するにとどまり、これらを敷衍していない。ともあれ、これらについては後に、マルクス自身の人口論について検討する際に改めて触れることになる。

以上、マルクスのマルサス人口論批判の要点について吟味してきた。マルクスの論述のなかに、マルクス自身の「方法」が黙示的に開示されていることはみてきたとおりである。この「方法」についてはいわゆるプラン問題との関連において後に改めて検討するとして、ここではマルクスのマルサス批判の特徴について少しばかり補足するた

<sup>56</sup> 同前、334ページ。

<sup>57</sup> 同前、同ページ。

<sup>58</sup> 同前、同ページ。

めに以下、マルサス批判に対する「批判」——反論というべきか——を取り上げる。

マルサス研究者の小林時三郎（敬称略）は著書『マルサス経済学の方法』において、「マルサスとマルクス」と題する章を設けて、マルクスによるマルサス批判を組上りにのせている<sup>59</sup>。先ず初めに敢えて指摘しておくべきは、この一章は上に触れたシュムペーターのマルクス批判に踵を接しているということである。もちろん、シュムペーターとは異なる独自の視角から批判を展開している。また、マルクス批判者の多くが印象批評のレベルに止まっているのは異なり、より丁寧に批判を加えているという点も指摘しておきたい。

ともあれ、小林は先ずもってマルクスの文章について、「アジがはいっている」あるいは「生々しい血の気がでくるよう」というように文学的に表現する。確かに上述のように、マルクスのマルサス批判には“悪罵”に近い叙述がみいだされるのであるが、小林はこの点を捉えて、それはひとつの「イデオロギー」であるとみなしている。ここでは明らかに、“悪罵”なるものと“イデオロギー”とが取り替えられており、こうしたやり方は当を得ているとは言い難い。

小林はさらに筆をすすめて、この「イデオロギー」なるものは「セクショナルな利害」に関連しており、「理念や信念の体系」にほかならないという。このような言い方は、あたかもマルクスのマルサス批判がこの「理念や信念の体系」に基づくものであるかのように暗示しているのだが、明示的に断ずることに逡巡して、次のようにのべる。「マルクスの著作にアジがはいっているといっても、もちろんそれによってその著作の理論的価値が左右され

ているというつもりはない。そういう部分を抜き去ってみても、影響はあるまい。むしろ、そういう部分を全部抜き去って、理論を理論として研究するのが理論の分野における最初の作業であるといつてさしつかえないであろう。」<sup>60</sup>

ここにみられる「理論を理論として研究するのが理論の分野における最初の作業」というくだりについて寸評を添えたとすれば、マルクスの『資本論』のばあい、先行する諸学説（理論）の批判（“経済学批判”）の集大成としてひとつの理論体系に結実したたものといふべきであるが、“俗流経済学”の「理論」に対する批判のみでなく、その「イデオロギー」に対する批判もまた随所に織り込まれていることを、まず、ここに強調しておきたい。先に触れた手稿『賃金』や『経済学草稿』におけるマルサス批判にあっても同様である。これらにあつては、科学（理論）と思想とが縋い合わさって展開されているのである。少しばかり敷衍すれば、思想を抜き去った蒸留水のような理論ではなく、その形成において触媒として機能する思想の浸透した理論が展開されているということである。『資本論』の卓越性もこうした点にあるといえよう。

ただし、マルサス批判にあつては、小林も指摘するように、確かにマルクスの文章には“悪罵”と紛う辛辣な表現がみいだされることは、先述のとおりであるが、われわれはこの点に関わって、マルサスの思想そのものの「残忍性」——「資本の残忍なものの考え方に残忍な表現を与えた」（マルクス〔既引用〕）ということ——、剽窃問題、同時代人のマルサス批判の水脈、さらには時代精神（思潮）等々について縷々論述しておいた。こ

<sup>59</sup> 小林時三郎『マルサス経済学の方法』現代書館、1968、187-203ページ。

<sup>60</sup> 同前、188ページ。

うした点を視野の外において、マルクスの“悪罵”を論難するのは、一方的である。

ともあれ、小林は上のような前置きに次いで、マルクスのマルサス批判を組上りにのせる前に、マルサスとマルクスの理論を対置する。まず、マルサスの理論にあつては、「生活資料に比べて人口の絶対数が過剰におちいる」とされるので、これを「絶対的過剰人口論」と呼び、貧困の解決は、「労働人口の増殖を食物の生産に適応させること」であり、「労働者に向かって、産児制限の福音を説教することを主要な任務とするにいたった」<sup>61</sup> というように概括する。これに対して、マルクスの人口論は「相対的過剰人口論」であるとし、これを『資本論』における蓄積論から引証する。そして、次のように締めくくる。「マルクスは、社会主義社会になれば、生活資料の分配が平等となり、勤労意欲の解放によって生産力の急速な向上が可能となると希望的観測を述べた。ただ、人口爆発のもとでは、社会制度の変革のみで問題が解決するかどうか問題である」<sup>62</sup> と。

だが、こうした解釈は俄かには首肯しがたい。第一に、マルサスの人口論を「絶対的過剰人口論」と呼ぶことは、マルサスの命題に即するとすれば、間違っているとはいえない。何となれば、この命題にあつては、生存手段と人口（の絶対数）の“比”は単なる算術の問題にはかならないのだから。だが、この関係は別の角度からは、“相対的”と読み替えることも可能である。J.ボナーが「マルサスは常に、過剰人口は相対的であり、実際の食物に対して相対的である」<sup>63</sup> と言い切ると

き、ボナーは明らかに読み替えているのである。いずれにせよ、この“比”そのものも理論的に破産し、歴史の検証にも耐えることができなかったのである。つまるところ、“絶対的”ということの含意は、約めていえば、先述の「自然法則」の属性であり、したがってまた、超歴史的なもの<sup>64</sup>の謂いというべきであろう。これを言い換えれば、マルクスが評するように、「あらゆる社会形態のもとに過剰人口の事実がある」（既引用）ということの一表現ということになろう。このようにマルサスの人口論の核心を剔抉すれば、「絶対的過剰人口」もマルクスの「相対的過剰人口」との対比において、単なる語呂合わせに墮することなく、マルサス人口論の本質を言い表わすことができよう。

第二に指摘すべきは、マルサスは「産児制限の福音を説教することを主要な任務」としたというくだりは明らかに、事実と反する。われわれは既に本稿のシリーズ〔4〕において、マルサスは“産児制限”に反対の立場を表明していたことに触れておいた。小林の書においては、マルサスが牧師であることから、「福音」「説教」なる言葉が用いられたものと思われるが、いずれにせよ、ここではマルサスの“道徳的抑制”を“産児制限”の範疇に含めているのではないか。そうでないとすれば、混同または取り違えがあったということであろう。

第三に、マルクスの人口論について説明するなかで、未来社会（社会主義）に言及しているくだりは解り難い。天空から「人口爆発」なるもの

<sup>61</sup> 同前、188-189ページ。

<sup>62</sup> 同前、190ページ。

<sup>63</sup> J. Bonar, *Malthus and his Work*, George Allen & Unwin, Second Edition, 1924.p.390. 掘経夫・吉田秀夫訳『マルサスと彼の業績』改造社、1930、534ページ。

<sup>64</sup> 小林もマルサスの人口理論は「宗教観と超歴史的な概念であつて、これはひとつの宗教的必然論であると解することができる」（前掲書、201ページ）とのべている。

を持ち込んできて、「社会制度の変革のみで問題が解決するかどうか」は「問題」であるとする所見——所信というべきか——を開陳している。何らかの引証があれば理解もできようが、ここではそれも叶わない。管見するに、マルクスは未来社会の人口については殆ど論じていない。どうしてこのような評定が可能なのであろうか。況や、起こるかもしれない「人口爆発」という特異な現象を持ち込み、マルクスの人口論に疑問を呈するというのは奇異なやり方ではなからうか。

いずれにせよ、小林はこのようにふたつの人口論を対比し、その結論として次のようにのべる。「右のように、マルサスの人口論はマルクスによって厳しく批判された」<sup>65</sup>と。だが、小林の論述のなかには、マルクスによるマルサス批判についての記述はみあたらない。敢えて指目すれば、「勤労意欲の解放によって生産力の急速な向上が可能となると希望的観測」というくだりがマルサス批判に相当するということであらうか。そうであるとすれば、われわれのこれまでの論述に照らし合わせて、的外れというほかない。

小林はさらに続けて、マルクスはマルサスの人口論をめぐって、「猛烈な悪罵」を浴びせたとして、それらを拾い出して列挙し、総括的に次のようにのべる「総じて、マルクスの批判や罵倒は、相手のすぐれたところはほとんど無視し、弱点に向かって攻撃を集中する。しかし、よく考えてみると、マルクスの攻撃の対象となった人は、よしあしは別として、第一級の人物のみである。つまりは、影響力のある人びとのみであった」<sup>66</sup>と。か

なり情緒的な叙述である。このことは措くとしても、ここで留意すべきは、マルクスはスミスやリカードに対するばあいとは異なり、マルサスに対しては一片の「すぐれたところ」もみいだすことができなかったのである。第一級の人物云々については、こうしたマルサス評価はマルサス擁護論に共通するものであるという指摘だけで十分であらう。先述のシュムペーターのマルサス評価も例外ではないのである。さらにいえば、ここにもるように、マルクスのマルサス批判への反論（批判）は、当然のことながら、マルサス擁護論と表裏一体の関係にあるのである。

このマルサス擁護論との関連において刮目されるのは、マルサスとマルクスの経済思想は「極めて」類似しているとされている点である。すなわち、ふたりは共に貧者の「解放」を志向したというのである。こうした主張は、マルクスとマルサスとを抱き合わせて、黙示的にマルサスを擁護するものであるが、理解しがたい。われわれはさしあたり、先にマルサスにおける「社会改良」なるものはひとつの錯誤にほかならないことを論じた（本稿シリーズ〔4〕参照）ということをここに付言しておきたい（併せて、先述のマルサス批判の水脈が参照されるべきである）。

もうひとつ、小林のマルサス擁護論に触れておきたい。小林によれば、マルサスの人口と食料の不均衡という人口史観は彼の「生命線」であり、不変であったという<sup>67</sup>。この「生命線」に対してマルクが根底的な批判を加えたことは上にみるとおりであるが、この問題は「人類永遠の課題」で

<sup>65</sup> 同前，191ページ。

<sup>66</sup> 同前，191-192ページ。

<sup>67</sup> 因みに、J.S.ミルは人口と食料の不均衡というマルサスの命題について、「例解のつもりで試みた軽い言葉」「不手際な試み」であるとのべている（J.S.Mill, *Principles of Political Economy, with Some of Their Applications to Social Philosophy*, Vol. I, John W.Parker, 1848, p.421. 末永茂喜訳『経済学原理』（二），岩波文庫，1960，305ページ）。独特の評定である。なお、ミルの人口論の検討は他日を期したい。

あるとする見地から、小林は次のようにのべる。  
「この人口対食料という問題そのものにかぎってみれば人類永遠の課題であるわけであって、マルサスをたんにその面でのみ把えるならば、マルサスは永久に生きのびるであろう。しかし貧民救済の手段を含めてマルサス人口論を把えるならば、マルクスの批判が有効性を発揮してくるであろう。」<sup>68</sup>  
小林はここでもマルサスとマルクスとを抱き合わせているのだが、人口と食料の不均衡というマルサスの命題を全的に擁護している。こうした捉え方は、〈マルサスカマルクスか〉という問いに対するひとつの回答とみることもできるが、われわれが後にマルクス人口論の意義と限界について論究するとき、この問題は改めて俎上にのぼることになる。

---

<sup>68</sup> 小林時三郎，前掲書，200ページ。